

# おはえ 尾八重神楽の音楽

黒木 亜美子

The Music of Ohae Kagura

Amiko KUROKI

## 1. はじめに

筆者は、2008年(平成21年)3月発行の「宮崎学園短期大学紀要」第1号に「尾八重神楽の音楽①(p.p.59～68)」を投稿した際に、「今回はシリーズその①として報告させていただくが、おそらく今後かなりの年月を要することになるだろう」という旨の文章を書いた。本稿は「その②」として、丁度夜半頃に舞われる14番“四方鬼神 地舞”と15番“四方鬼神”について報告するものである。①で尾八重神楽には探るべき点が多いようだ(他所と音楽的に違う)と記した。まさにその番付に相当するものである。

## 2. “四方鬼神 地舞”と“四方鬼神”について

地舞とは、神が降臨して舞う際の、いわば先導(祓い清めも含む)と送り出しの舞で、途中、神と向き合って舞う場面もある。(“おしき”と呼ばれている。)

四方鬼神地舞は、特に幣差ヒサシと呼ばれるもので、素襖を羽織って、毛頭を被った四人の舞人によって舞われる。

その名の通り腰の後に2本の御幣を差しており、右手に鈴、左手に扇(日の丸)を持っている。

御幣の色は、紫(黒)、緑(青)、白、赤を各々が使うが、おそらく東(緑)、西(白)、南(赤)、北(紫)を示すものだと考えられる。

入場して正面に向けて座した後、片膝立てて手指をつけた姿勢で礼をする。立ち上がって1回鈴を鳴らした後、反対側の足と手で同じ礼をする。再び立ち上がって、やや腰を落とした後に体をひねりながら扇を開く。(鈴1回)その後鈴をジャラジャラと鳴らしながら両手を開き回す。扇は逆手に持っている。一旦座した後立ち上がって扇を閉じて前方に突き出して、体を左右にゆらした後、本曲(舞と囃子の本体部分)に入る。(楽譜①参照)

袖を巻き、左右に体をゆらしながらゆっくりと時計回り方向に移動していく。ただし、その間、足は爪先立ちで、しかもかかとを少し浮かしながら上下動も加えられるので、一見ゆったりした舞に見えるが、相当な足腰の強さが必要であろうし、背筋は伸ばしたままである。<sup>注1)</sup> また、両腕を

突き出したまま舟をこぐような前後動も入り、非常にユニークな舞い方と言えよう。

袖を巻き直して同じ所作をくり返し、横一列で交互に位置換えをする(計2回)

袖を元に戻して、全員正面を向き、鈴をジャラジャラさせ、一旦座礼をした後(その間、打楽器は流し打ちをしている。)立ち上がって左袖を巻き、神歌を歌いながら後ろ向きからまた前と同じ舟こぎ動作を含む舞いを行う。次に規則正しい鈴の振り方になって前述したのと同じように舞っていく。なお、この場合の“規則正しい鈴”とは手首のスナップをきかせて手前に引く鳴らし方、神歌が入る時はジャラジャラである。(ジャラジャラ鈴の時は前鳴らしである。)途中何度もしゃがみこむようにまた座るように重心を落として伸び上がる所作が入る。

また、立て膝に座して弓矢を引くような動作(例えとしてはミスマッチであろうが、丁度陸上選手のリルトが走る前に行うポーズを座らせてやったような感じの所作)を行うが、その前後は袖を巻く。

しばらく後に囃子のテンポが速くなり、(楽譜①)扇を揚げ、ジャラジャラと鈴を鳴らしながら時計回りに祭場を巡る。全員が同じ方向を向いてからは規則正しい鈴に合わせて体を回しながら、四角形の舞い位置に戻り、扇を開き持って舞ううちに、四方鬼神が“同じ囃子”の中で入場してくる。

### 3. 四方鬼神

東西南北の色の鬼神棒を持ち、各々の色の神面をつけた4人の神々が登場する。写真1)

しかし、「鬼神」と言われているが、角の無い面に毛頭、錦の千早と大口袴、後腰に御幣をさしている。

左袖をつかんだまま、鬼神棒を左腰にあてがい、体をゆらしつつ、立ったり座ったりを繰り返しながら各々の座につく。座ったまま鬼神棒を上にも繰り上げ、繰り下げた後、時計回りに腰を落としてから体を伸ばしながら、四隅に座し控えていた地舞と“おしき”注2)をする。当然ながら、地舞と鬼神は同じ方向を表す者同士で舞う。この時の地舞の鈴は引き鈴であり、扇は肩に揚げ持つ。鬼神も前半は鬼神棒を両手で揚げ持っているが、後半は右手には開いた扇を揚げ、左手は腰に鬼神棒をあてがっている。

後半の鬼神だけの舞は、内側に向い合って、一人ずつ座して鬼神棒を両手で仰ぎ見た後に鬼神棒を左手に立てて持ち、右手の扇であおぐような所作をする。注3)

それが終って“おしき”をしている時に、おもむろに中王が現れる。写真2)(乱入してくる)

この中王は、“中央”を示し、黄色の鬼神棒を持つが、黒い翁面様の面をつけ、立烏帽子を被り、赤い鉢巻をつけ、素襖(白装束、つまり地舞と同じで、鬼神装束ではない)に赤色のたすきを斜めにかけて、赤い腰ヒモを垂らしており、帯刀している。ただし、この刀を抜くことはない。中央で跳ね飛びながら、時には鬼神と取っ組み合いをしたりして周囲を笑わせつつ四方鬼神を祭場から追い出してしまう。

後は一人舞で“飛び跳ねる”という表現に当てはまるがごとく、カラス飛びが高くなったような足取りの後に片足を高く(スキップが高くなったような足取り)跳ね上げながら祭場を回り跳ぶ。左手は袖をつかみ、右手の鬼神棒を振り回す。

ただし、囃子に変化は無い。四方鬼神と同じく座して鬼神棒を両手で揚げた後、右手扇で左手に立て持った鬼神棒をおおぐような所作をする。

また、後半は左手に鬼神棒、右手に開いた扇を持つ。おしきもするが、その後正面に向いて座して上を仰ぎ見ながら神歌(唱行?)を歌う。その後はまた跳ね舞いながら、座して仰ぐ所作を入れる。

中王が正面に礼を取った後は再び地舞だけ<sup>写真3)</sup>になり、ジャラジャラ鈴と肩に揚げた扇に規則正しい鈴を交えながら前半と同じように、いわば“祭場全体を清める”と思われる所作の舞を舞う。

前半もそうであるが、この舞は、しきりに袖を巻き、また座舞も多い。

最後に素襖を脱ぎ、紐状にして揚げ持って舞う。

ここで他所の神楽は“素襖つかい”という、紐状の素襖を回しながら舞う派手な部分があるが、尾八重ではカラス飛びをしながら素襖を揚げ持つのみ、が特徴的である。

一体に、尾八重神楽は他の米良神楽よりも“穏やかな”舞いぶりであると言えよう。素襖舞を終えた後は、御幣を右手に持ち、左手に刀印を結んで舞う。刀印を結んだ後に左手を腰に当てて時計回りに舞うが、この時、どこの神楽にもおそらく無いであろう、驚くべき所作が行われる。即ち片足だけで、まるで高いスキップをするように同じ場所で4回跳ねるのである。(計3回)しかし相変わらず囃子は変わらない。この所作の後には必ず弓矢引きのポーズが行われる。後半になるほど、この「弓矢引き」とカラス飛びをしながら回転する所作が多くなる。

おそらく神楽33番の中でも最も体力を使う舞の一つであろう。

### 3. 尾八重神楽の音楽について(四方鬼神地舞と四方鬼神舞)

筆者は神楽の音楽については、松永建の“ライトモチーフ論”<sup>注4)</sup>に基づいて、宮崎市の神楽の音楽にも同じ傾向がある、と論じてきた。

しかし、尾八重神楽の音楽においては例外であるようだ、との旨を前回(尾八重神楽の音楽①)に提示した。

この、四方鬼神地舞と四方鬼神舞(五人舞)については、まさにその通りであると言って良いだろう。

通常、神楽は、神の入、退場の場合、囃子が変わると共に、各々の神の“ライトモチーフ的”なパターンの囃子がつく。

しかし、四方鬼神地舞と四方鬼神の登場においては音楽的变化はみられない。

いつの間にか四方鬼神が祭場に入場してくるので、同じ囃子だから、と目をそらしていると、鬼神の入場を見逃してしまう。

ただ、中王神が舞い始めると、明らかに異なる囃子となる。

この神は、四方鬼神を祭場から追い出した後に一人舞を舞う。その際の舞いぶりと囃子がそれまでと若干異なってくる。(楽譜参照)

舞いぶりは、四方鬼神と異なり、“跳ねる”神である。

スキップしながら(含、カラス飛び)方向転換の際(?)に前片足を跳ね上げるのである。

さながら、まだ半分しか進行していないが祭が成就したことを喜んでいようにも見える。

中王(黄色)とされているのは、陰陽五行道の中央(黄色)に通じるものがあるようだ。この後の演目の「獅子」は全く別の囃子となる。

「獅子」が“笑い”の舞に通じていく(獅子が戯れる)こともあり、「荒神」(山の神?)とのやり取りの後の演目の「磐石」(平野部では「田の神」になるとされている<sup>注5)</sup>)という、囃子方や観客と卑わいな動作をして笑わせる神舞になることを考えると、山と平地をつなぐ笑いのものとして、囃子が変わっていくと考えられなくもないだろう。

更に言わせてもらおうと、その後の演目は「神和」<sup>カンナギ</sup>という、平地では「民舞」<sup>ウジマイ</sup>や「中の手」と呼ばれる、腰を振りながら舞う女神舞となり、その囃子は平地の神楽の音楽の“豊穰、生産”を示すものによっていくことをかんがみると、山の神楽と平地の神楽のつなぎの“豊穰の予祝舞”と取れなくもないだろう。

五方の鎮めとも取るなら、その後の「獅子」は山の猪を示すだけでなく、陰陽道の変化に従うものとも言えるだろう。<sup>注6)</sup>

この演目あたりになると「幣差」とは異なるリズムと速さの囃子に変わっている。

「獅子」以降の演目、特に「磐石」は、音楽的要素が全く異なるものとなるので、「尾八重神楽の音楽②」はここで終えて、③で詳述していかねばなるまい。

③では、平地の神楽との共通点が多く発見されると思われる。

#### 4. 神楽はやし歌について

他所でも聞かれるが、尾八重神楽には、「神楽はやし歌」という、観衆が即興で歌う、歌垣にも似た声楽がある。

西米良の村所神楽では「神神楽」と「民神楽」とに分けられ、神楽番付後半の「民神楽」になるまでは神楽はやし歌は歌ってはならないことになっている。

尾八重神楽にはそのような区別はなく、興が乗ってきたら、いつでも歌われ、その歌詞には極めてきわどいものもある。舞手を鼓舞し、神楽を催促する性格のものでもあり、戦前は実際に無礼講だったらしい。

この神楽はやし歌及び神歌(今回は省略させてもらう)は、場合によっては(囃子の笛にも)西洋音楽風に表すと、「三度間隔の上昇分散和音的な旋律」が出てくる。(ドーミーソーのような型)

これは、日本音楽的には非常に珍しい音型と言える。ホーイホイと、裏声でのかけ声もあり、(話はいきなり飛んでしまうが)中国の照葉樹林文化圏の少数民族の歌のかけ合いと、極めて似ているものがある。

#### 5. カラス飛びについて

①で示した、“サンガ”の人々が尾八重神楽の芸能に関わったのではないか、という説と共に、もう一つ“カラス飛び”の形態によく似た体さばきについての文章を見つけたので、ここで紹介して

おこうと思う。(まるっきり見間違いかもしれないが)

「たたずまいの美学—日本人の身体技法」矢田部 英正 2011 中央公論社

この著書の中に、“水田を歩く際にも爪先に重心を置いてかかとを軽く上げる”というような記述があり、「山の神楽＝跳ねる／平地の神楽＝歩く」という考えを私は覆されたのである。

この点でも、尾八重神楽の“カラス飛び”に対する考え方が変わっていくような気がする。

## 6. おわりに

前述したように、引き続き「尾八重神楽の音楽③」へと、つなげていく予定である。

音楽だけでなく、祭場の作り方や装束、舞いぶり等々にも特徴的なものが多く、「尾八重神楽は他の米良神楽とは趣を異にする」<sup>注7)</sup>と言わしめる要素が数多くあり、今回は陰陽五行的な舞について報告させていただいたが、他所の神楽「都萬<sup>ツマ</sup>神楽」や、「米良神楽」とされているものの中との、例えば「越野尾神楽」等との比較、検討や、平地の神楽とのつながり等、報告すべきことは数多く残ってしまった。

順次補充していく予定である。

その中には松永建の“3拍子と混合拍子”について(尾八重神楽にも存在する)や、“楽板”のことについても参照する部分が多くなると思う。

**追記：**筆者は適切な写真を撮れていないので、インターネット上での写真をご覧になることをお勧めする。

「尾八重神楽 | 西都市」を検索すれば、MORIMORI 氏の撮影された平成 19 年の祭当日及び平成 23 年 4 月の写真と解説が書き込まれているので参照されたい。(一部動画有り)

## 注

注 1) カラス跳びではない。

注 2) 「尾八重神楽の伝承—三十三番番付の解説」佐々木 昌代・元水 均・中武 貞夫(宮崎学園短期大学紀要第 2 号 P.129)によると、舞のまとまり毎の区切りに行う所作のことであり、その所作は舞によって異なるという。

注 3) この所作は、宮崎市の神楽の神も同じことをする。

注 4) 松永 建「南九州の諸神楽の研究—高千穂・銀鏡・祓川神楽—」  
“音楽と音楽学—服部 幸三先生生還暦記念論文集—” P.P.619~64

注 5) 小野 重朗(故人)をはじめとする、民俗学関係者の通説となっている。

注 6) 「陰陽の世界—ト占の呪術」西川 照子 構成  
別冊太陽 日本のこころ—121 平凡社2002 参照

注 7) インターネット上の記述である。

## 参考資料

- ・ インターネット“尾八重神楽 | 西都市” 写真：MORIMORI氏 2009
- ・ 同上“ひむかブログ2” 2007～2011
- ・ 同上“ビデオで見る神話街道：ひむかの神話・伝説を巡る道”
- ・ 同上“尾八重神楽” 2008
- ・ 同上“尾八重神楽の舞7” 2003
- ・ DVD「尾八重神楽 宮崎県指定 無形文化財」ふるさと文化再興事業 2002
- ・ 筆者撮影ビデオ 1987
- ・ ビデオ(ライブ)“古老の舞” 甲斐 恵 中武 功 1984
- ・ 吉川 周平 編「民俗芸能における神楽の諸相」  
“神楽の音楽に現れる三拍子と混合三拍子について” P.P.107～116 松永 建  
京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 2009
- ・ 黒木 亜美子「宮崎市の神楽の音楽－生目(イキメ)神楽の場合」宮崎女子短期大学紀要第11号  
P.P.10～37 宮崎女子短期大学 1984
- ・ 黒木 亜美子「尾八重神楽の音楽①」宮崎学園短期大学紀要第1号 P.P.59～68 宮崎学園短期  
大学 2009
- ・ 佐々木 昌代、元水 均、中武 貞夫「尾八重神楽の伝承」宮崎学園短期大学紀要第2号  
P.P.125～143 宮崎学園短期大学 2010
- ・ 高見 乾司「米良山系の神楽 その伝承世界と仮面神の系譜」みやざき文庫72 鉾脈社 2010
- ・ 高見 乾司(文)、小川 孝浩(写真)「西米良神楽」西米良村教育委員会編 鉾脈社 2009
- ・ 中武 貞夫「尾八重神楽発祥の地－湯之片神社の祭りと歴史」みやざき民俗第63号  
P.P.28～39 宮崎県民俗学会 鉾脈社 2010
- ・ 西川 照子 構成「陰陽の世界－ト占の呪術」別冊太陽 日本のこころ121 平凡社 2003
- ・ 矢田部 英正「たたずまいの美学－日本人の身体技法」中公文庫762 中央公論新書 2011
- ・ 山口 保明「宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承」みやざき文庫2 鉾脈社 2000



写真1  
「四方鬼神」



写真2 「中王」



写真3  
「幣差 後半」

〔幣差基本部〕 楽譜①

※ 太鼓・楽板・銅拍子・笛のリズムと同じ

注) ②~⑬は全て笛のパート

②

④

⑥

⑧

⑩

⑫

注) 笛は、以降指示が無ければ全て1オクターブ上の音域である。

①の部分に②~⑬等の音型が続いて変化する。

◎ 五線譜に記したものは、あくまでも代表例の一つであり、  
囃子全体としては多くのvarianteがある。



〔序奏〕 〔変り目〕 ※

笛

8v. ♩ = 86

8v.

8v.

8v.

※ 打楽器は流し打ち

神歌入り

8v. ……以降全て1oct.上

(笛)

実音

8v.

実音

中央(黄色)神

8v.

(笛)

(打楽器)

太

樂

銅

※ 分散和音的に始まる歌の冒頭の音階

The musical score consists of six staves. The first staff shows a dispersed harmonic introduction with two measures of chords: a triad of G4, B4, and D5, followed by a triad of G4, B4, and D5. The second staff begins with the tempo marking 'ad. lib.' and the title '神楽はやし歌'. The vocal line starts with a quarter note G4, followed by quarter notes A4, B4, and C5, then a sixteenth-note triplet of G4, A4, and B4, followed by quarter notes C5, B4, A4, and G4. The lyrics 'ホイホイ (裏声)' are written below the notes. The third staff continues the melody with quarter notes G4, A4, B4, and C5, followed by a half note G4 with a flat sign, then quarter notes F4, E4, and D4. The fourth staff continues with quarter notes C4, B3, A3, and G3, followed by quarter notes F3, E3, and D3. The fifth staff continues with quarter notes C3, B2, A2, and G2, followed by quarter notes F2, E2, and D2. The sixth staff continues with quarter notes C2, B1, and A1, followed by quarter notes G1, F1, and E1. The word 'etc.' is written at the end of the fifth staff. A triplet of eighth notes (G4, A4, B4) is marked with a '3' above it in the sixth staff.

